

掲載コンテンツのご紹介

平成29年度に追加しました、20本の地域映像の概要をご紹介します。
実際の映像は「地域文化資産デジタルコンテンツ発信事業ポータルサイト」にてご覧頂けます。



ほっかいどう しべつし しべつし むけい ぶんかざい みずほ ししまい いっせいき
北海道士別市 <士別市無形文化財>「瑞穂獅子舞の一世紀」

士別市朝日町瑞穂地区に伝わる獅子舞は、富山県からの移住者が伝えた。大正5年(1916年)九線神社(きゅうせんじんじゃ)(その後朝日神社と改名)例大祭で獅子舞が奉納されたのを最初とし、2015年で一世紀に亘り獅子舞が受け継がれてきたことになる。演目は当初「あふれ獅子」「ひき獅子」「へび獅子」の3演目が伝えられたが、後に「おろろ獅子」が追加された。昭和33年(1958年)には、子供獅子舞が始められ、昭和44年(1969年)には「瑞穂獅子舞保存会」が設立され、朝日町指定文化財となった。昭和52年(1977年)には「花笠の舞」「扇踊り」の創作、また平成元年(1989年)には「瑞穂獅子舞伝習館」が設立されて、瑞穂獅子舞の中心的拠点となった。最近では踊り手が少なくなったとのことであるが、関係者の伝承に対する強い熱意が、映像を通して感受される。【平成27年度制作】



あおもりけん ろくのへまち ろくのへまち むけい ぶんかざい
青森県六戸町 <六戸町無形文化財>
おりも いまくま かぐら かみよしだ なんぶ こまおどり かみよしだ だいこく まい つるばけいまい
「折茂今熊神楽」「上吉田南部駒舞」「上吉田大黒舞」「鶴喰鶏舞」

「折茂今熊神楽」は五穀豊穡を願って舞踏する山伏神楽である。400年以上前から舞踏化され始めたこととされ、今熊保食神社(いまくまうけもちじんじゃ)の氏子達によって伝承されてきた。江戸期に「今熊獅子舞」と命名、一時衰退したが明治期には獅子舞を再開した。獅子を操る際の歯打ちや素早い動きが特徴とされる。

「上吉田南部駒舞」は野馬捕りを舞踏化したものとされる。保存会の活動によって、近年、子供の踊り手も多くなってきた。「七つ道具」は野馬を捕獲する時の道具を持った勢子たちのしぐさを舞踏化した踊りといわれる。

「上吉田大黒舞」は江戸後期に始まり、五穀豊穡を祈る「門付け」を変化させたものと言われている。一時衰退したが明治・大正期には復活し、大黒様の格好をし、打出小槌を持って踊り、家内安全・商売繁盛を祈る。

「鶴喰鶏舞」は古くは文久の頃既に存在したと言われている。踊り念仏の形をとり五穀豊穡、家内安全、無病息災を祈る。女鶏舞として昭和33年に復活、現在は若い女性を中心に、庭入り、さんさ踊り、一本扇子等の演目がある。【平成27年度制作】



あおもりけん はしかみちょう さんのへぐん はしかみちょうけい みんぞく ぶんかざい
青森県階上町 <三戸郡階上町無形民俗文化財>
さいこうじ
「西光寺ナニヤドヤラ」

ナニヤドヤラは岩手県葛巻(くずまき)・一戸以北から青森県上北郡一帯にかけて踊られている。その特色は足で土を摺(す)るように動かして踊ることである。

この他日常生活の機微にふれるようなもの等、さまざまな歌をアドリブ的に作り出し、夜明けのカラスが鳴くまで、一晩中踊ったものと言われている。

戦前は13日から16日の間踊ったものだが今は盆の期間中1日だけ行われている。広く踊られている太鼓を中心としたリズムカルで跳躍的な踊りと違い、西光寺のものは笛、太鼓等の伴奏楽器を全く使わない形で、十二歩のステップで一単位になっている「十二足(じゅうにあし)」という昔からの踊り方が現在まで続いており、この地域でも数少ない古手の盆踊りの形態を伝えるものである。昭和50年に保存会を設立し、平成27年で40周年を迎えた。

他の地域では「鍬ヶ崎(くわがさき)」として踊られている。【平成27年度制作】



ふくしまけん にほんまつし ふくしまけん してい じゅうようむけい ぶんかざい
福島県二本松市＜福島県指定重要無形文化財＞
 おばま ながおり さん びきしまい
「小浜長折の三匹獅子舞」

毎年5月4日、下長折(しもながおり)の諏訪神社に三匹獅子舞が奉納される。岩代(いわしろ)地域には滝洞(たきほら)、東方(ひがしかた)、中洞(なかほら)地区があり、滝洞地区は「滝の荒獅子」等勇壮な獅子舞が特徴であり、東方地区は「花吸いがかりの獅子」とも呼ばれ比較のおとなしい舞である。また、中洞地区は「庭虫(にわとり)がかりの獅子」と呼ばれ、全体的に優美で技巧的であることが特徴で、それぞれ異なった獅子舞が伝承されている。

三匹の獅子は「太郎獅子」「次郎獅子」「雌獅子(めんじし)」で構成される。祭礼当日諏訪神社境内では、まず午前には年少者による「奉納獅子」が舞われ、午後からは年長者による「手伝い獅子」が奉納される。「みちぎり」「町囃子(まちばやし)」「舞込み」「宿入り」等10演目ほどが披露される。

奉納の翌日は、それぞれの地区で、“庭元”の家に女性を招き「庭がため」を披露して一連の行事を終える。【平成26年度制作】



ふくしまけん かわまたまち まちしてい むけい ぶんぞく ぶんかざい
福島県川俣町＜町指定無形民俗文化財＞
 やまきや やさかじんじゃ さん びきしし まい しもぐみ
「山木屋八坂神社三匹獅子舞 下組」

江戸中期(少なくとも180年以前)この地が凶作となり、疫病がはやり、ヤマノケが農作物を荒らすといった事が起きた。そこで人々は神社に獅子舞を奉納し、五穀豊穡、悪霊退散を祈願したことから始まったとされている。当地の三匹獅子舞の特徴は“勇壮な舞”と賑やかな“お囃子”にあるとされる。

この三匹獅子舞は、毎年上組と下組が交代で“宿”を受け持ち続けられてきた。今日まで伝承されてきたのは、“宿”制度にあるといわれている。“宿”となった家は、獅子舞に必要なものを2年間に亘って保管し、演舞終了後のもてなしなどを行った。

演目は「六拍子」「そぞろき」「宿入り」「みずあげ」「しんがしょうしょう」「おか」「雌獅子かけ」「花受けの舞」の8曲である。

東日本大震災の影響で、現在は地元での披露が出来ず、他の地域からの要請に応じて出向き披露している。【平成26年度制作】



ふくしまけん おのまち ふくしまけん じゅうようむけい ぶんぞく ぶんかざい
福島県小野町＜福島県重要無形民俗文化財＞
 おの ししまい
「小野の獅子舞」

大倉獅子舞は、毎年地元の塩釜神社の秋の祭礼に奉納されている。

由来は、元久元年(1204年)地元の先崎主水と郡司内膳の二人が使者となり陸前の塩釜神社に請願を立て、角膳(四角の膳)に2つにご幣を納めて持ち帰った。後年、先崎家の子孫がその角膳を“頭”として神楽獅子を舞い塩釜神社祭礼に奉納したのが始まりとされる。太郎獅子、次郎獅子各4人、雌獅子1人、ささら振り2人で構成される。

新田内長獅子舞は毎年9月に地区内の八雲(やくも)神社に奉納される。永禄5年(1562年)に勧請(かんじょう)した八雲神社の由来によれば、地区にふりかかる幾多の災いを鎮めるため獅子舞が奉納されるようになったとのこと。

浮金小獅子舞は毎年9月に地区の菅布禰(すがふね)神社の祭礼で奉納される。江戸時代天明の大飢饉の後、村の繁栄と安全を祈願して、菅布禰神社に奉納されたのが始まりとされる。少年たちが踊り手の為、重量のある腹太鼓を付けずに踊る3匹獅子舞である。【平成27年度制作】



ぐんまけん まえばしし
群馬県前橋市

えだ かがみじんじや ししまい にのみや あかぎ じんじや だいだいかぐら かみあおなし ほんおど
「江田鏡神社の獅子舞」「二之宮赤城神社太々神楽」「上青梨子盆踊り」

江田の獅子舞は毎年秋に地域の鎮守江田鏡神社に「五穀豊穡」「家内安全」「無病息災」を祈って奉納される。獅子は、「前(雄)獅子」「中(雌)獅子」「後(雄子)獅子」とカンカチの4人で踊られる。獅子舞は穏やかな舞振りで、能や田楽の流れをくむとされる。途中で「褒め言葉」と「返し言葉」の応酬があり特徴となっている。

二之宮赤城神社太々神楽は毎年正月1日と4月15日の大祭に奉納されている。起源は定かでないが、元禄～宝永の頃始まったとされる。本座15座、裏座9座は岩戸神楽に属すので、本座は優雅で“やまと舞”の系統、裏座は“里神楽”の系統と見られる。

上青梨子(かみあおなし)盆踊りは地域の「淡島神社」境内で行われる。起源は江戸寛永の念仏踊りから変化したものとされる。5つの踊りがあり「三つ打ち」天地の神々をお迎える。「回り打ち」四方の神々をお迎えし感謝の意を捧げる。「手ぬぐい踊り」自然に感謝し家内安全を祈願する。「石投げ」鳥獣を追い払い五穀豊穡を祈る。「糸巻き」糸を紡ぎ養蚕培養を祈願する。【平成26年度制作】



さいたまけん ふかやし し しいてい ぶんかさい おおづかししまい
埼玉県深谷市<市指定文化財>「大塚獅子舞」

大塚獅子舞の由来は、正安元年(1299年)に大塚の諏訪神社を村落の祭神として8月7日をその祭日と定めたことに始まる。その後天正15年(1587年)に戸主たちの協議により獅子舞が始められたと伝えられている。豊穡を祈り、実りを報告する舞が奉納された。

獅子舞は、舞手(小学生から選抜)3人、棒使い(小学生から選抜)2人、笛方(頭1人、助若若干名)、花笠2人、謡い手1人、ボンゼン1人で構成される。

現在は農事の関係もあり、10月17日前後に奉納されている。【平成27年度制作】



ちばけん まつどし
千葉県松戸市

へいせい よみがえ まつど おお
「平成に甦った松戸の大まつり」

しんこう さいふつかつ きせき かいさい きろく
～神幸祭復活の軌跡と開催記録～

松戸の神幸祭について、古くからの起源は定かではないが、昭和初期までは行われていたとの記録がある。60年以上途絶えていた神幸祭を復活しようとしたきっかけは、四神像の発見であった。平成元年、松戸神社の屋根修復に当たり、古くから伝えられていた御物の中から、この四神像が見つかり、昭和初期の写真等から行列の中に四神像が入っていることが確認でき、神幸祭復活のきっかけになったとのこと。

神幸祭復活の実行委員会が組織され、松戸駅周辺の町会、各種店舗それに各種企業も加わって分担し、四神像を始めとする行列に用いる各種道具等は修復を施し、かつての行列の順序なども検証して“大まつり”として復元するに至った。

映像は平成27年度に行われた神幸祭の記録であり、平成2年の初回“大まつり”から数えて5回目となる。松戸神社の大祭である10月18日で日曜日に重なる日に実施される決まりであり、次回は2020年東京オリンピック、パラリンピックの年に予定されている。【平成27年度制作】



あいちけん とよたし
愛知県豊田市

～とよたの祭事記録～ 「藤沢・押沢・松嶺地区の棒の手」

矢作川(やはぎがわ)の中流域に位置する豊田市藤沢地域で行われる祭りや棒の手を紹介した映像である。

住民は、昭和34年の伊勢湾台風をはじめ、度々洪水等の被害を受けており、毎年欠かさず、川の安全を祈願する「水神まつり」、「弁財天まつり」を行っている。

「水神まつり」は、江戸時代後期から毎年お盆に開催され、地域の全世帯が参加する。まつりは、水神囃子保存会の小学生が、お囃子を奉納する。平成4年まで屋形船を浮かべていた。「弁財天まつり」は、弁財天を祀り、水の事故や災害が起きぬようにと祈願されている。

10月には、「秋の大祭」が行われ、飾道具をお披露目し、五穀豊穡を祈願して「棒の手」を奉納する。藤沢地域には、豊田市に伝わる4流派のうち、鎌田流が伝わっている。現在、「一打(ひとつうち)」「差合(さしあい)」「本鎌(ほんがま)」「薙刀(なぎなた)」の4演目が行われている。

11月には、無病息災を祈念して、「お薬師まつり」が行われる。その年にできた米を使って、甘酒を作り、井でお供えする習わしがある。

12月下旬には、「大祓い(おおはらい)」が行われ、しめ縄やお札、お守りと共に人型の紙を燃やすことで、一年の穢れをとる。燃え盛る火に手を合わせ、清らかな気持ちで新年を迎える。【平成26年度制作】



わかやまけん たなべし
和歌山県田辺市

<県指定無形民俗文化財>「下川上の流れ施餓鬼」

和歌山県田辺市下川上では、毎年8月15日のお盆に流れ施餓鬼が行われている。この行事は約200年以上継承されている盆行事で、江戸時代文化年間に大水害がおこり多くの犠牲者が出た。施餓鬼はその霊を供養する為始められたといわれている。朝早くから山で骨組みとなる竹を切り出し、床に麦わらを敷いて、約8メートルの大きな舟を作る。舟に向かって祭壇が設けられ、その年亡くなった人の位牌や供物がおかれ、法要を行って故人の冥福を祈り、万物の霊が慰められる。川に沿って松明が焚かれると共に、舟にも火が入れられ川に流される。

その他に、次の伝統・歴史的事績や自然が紹介されている。

「法伝寺(ほうでんじ)胎内仏(たないぶつ)」<田辺市指定有形文化財>

「安の山の神(オオガミさん)」<田辺市指定有形文化財>

「八幡神社の大杉」<田辺市指定天然記念物>

「安川渓谷」大塔日置川県立自然公園

【平成26年度制作】



とっとりけん とっとりし
鳥取県鳥取市

—鳥取市の失われつつある伝統芸能—

鳥取県鳥取市「中大路だるま踊り」

鳥取市国府町神垣「神垣手笠踊り」<市指定無形民俗文化財>

鳥取市国府町成器「成器地区の盆踊り」

鳥取市河原町神馬「神馬の手笠踊り」

鳥取市用瀬町別府「別府義士踊り」

鳥取市用瀬町用瀬「用瀬はねそ踊り」

「中大路だるま踊り」大正末期に住民が発案したとされ、だるまの張り子を被ってユーモラスに踊る。倉田八幡宮の秋祭りで披露されている。「神垣手笠踊り」昔からあった傘踊りを基に大正時代に考案された手笠踊り。直径45cm程の手笠で踊り、踊りもお囃子も全て女性が行うのが特徴。「成器地区の盆踊り」国府町上地(わじ)で受け継がれた盆踊りで、50年前頃には200名程の女性がお堂で踊っていた。昔は未婚の女性が踊り、男が謡手であったが、現在は大人も子供も一緒に踊る。「神馬の手笠踊り」大正期は手踊りだったが、昭和21～22年頃、地区の青年が新たに考案した独自のもの。古くは盆踊り大会で何度も入賞している。8月14日に初盆の家で踊り、供養するのが目的。「別府義士踊り」明治期に浪速節の達者な村人が始めたもの。忠臣蔵の吉良邸討入りの場面を男の手踊りにしたもので大変珍しい、一瞬の衣装早替わりが見せ場で、毎年初盆の家を廻り、仏の供養をしている。「用瀬はねそ踊り」「はねそ」とは、着物のスソを跳ね上げる「跳ねスソ」からついたとか。景石城落城の鎮魂の踊りと言われ、昔は衣装も厳格であった。男女別の踊りが特徴で、明治期に一時期禁止となったが許されて毎年盆に正覚寺で踊られている。【平成26年度制作】



とくしまけんみよし いや ふすまえ
徳島県三好市 「祖谷のからくり襖絵」

西祖谷山(にしいややま)村に、全国的にも珍しい歌舞伎などの舞台の背景となる襖絵を、回転させたり引き分けたりして変化させる、カラクリを操作する技術が残されている。襖(タテ160センチ・ヨコ60センチ)9～10枚を並べて絵を描き、個々の襖を自在に動かして絵を入れ替える技である。絵は地元の農民が書いたとされる。明治から大正にかけて制作されたが、1950年頃公演されなくなった。平成17年頃の調査で、これらの襖が、保存されていることが解り、研究の結果再現することができた。

西祖谷山村後山地区に「後山(うしろやま)のからくり襖絵」が保存されていることが解り、平成19年保存会を結成、神社前の広場に組立式小屋掛舞台を建設、以来公演を行っている。襖絵は12種類ほど有り、これをタテ・ヨコ・ヨド・スマレンガクとよぶ様々な方法で、差し替えて見せるものである。

西祖谷山徳善地区に「徳善(とくぜん)のからくり襖絵」が残されていて、平成19年から年に3回程公演が行われている。やはり組み立て式舞台であり、都度組み立てに手間がかかる。内容については後山のものと同様である。

いずれの場合も、過疎化の中後継者不足が最大の課題ながら、継続の意思は固い。
【平成26年度制作】



かがわけんしやうどしまちやう こせい ゆた しま あきまつ
香川県小豆島町 「個性豊かな島の秋祭り」

オリーブで有名な小豆島は、周囲約140km、人口およそ3万人の小さな島である。10月に入ると各地の八幡神社で秋祭りが行われる。秋祭りでは、太鼓台の引き上げ奉納が行われ、地域毎に“かえし”“しゃしゃげ”等、勇壮な奉納の技に驚かされる。

“オシコミ”<町指定無形民俗文化財>は、手漕ぎの船に“太鼓台”をのせ、浜に押し込んだり、大きな幟を自在に操る“幟さし”<町指定無形民俗文化財>等、独特の神事が各地で行われ、祭は神社毎に様々な特色がある。

10月11日には「葺田(ふきた)八幡神社」「獅子せかし」「暴れ獅子」「薙刀踊り」等が行われる。10月13日は、島内の漁師町の「伊喜末(いぎすえ)八幡神社」で、珍しい飾り屋根の太鼓台奉納があり、10月14日、「土庄(とのしょう)八幡神社」では、大小さまざまな太鼓台が競演する。10月15日、「富丘(とみおか)八幡神社」は島の高台にあって海の眺めが最も良いが、急な階段を太鼓台が下りて行かぬばならない。10月15日「内海(うちのみ)八幡神社」では“幟さし”等が行われ、10月16日「亀山(かめやま)八幡宮」では“かえし”“オシコミ”“岩戸の舞”等がおこなわれる。また観衆の座席である棧敷は石垣の棚段になっている。<国指定重要有形民俗文化財> 【平成26年度制作】



くまもとけんかみあまくさし ひと つど まも つ きやうど げいのう
熊本県上天草市 ～人が集い、守り継がれる「郷土芸能」～

かみあまくさし でんとうぶんか けいしやうだんたい
「上天草市伝統文化継承団体」

この地域に伝統芸能を継承している3つの団体について、紹介されている。

「阿村(あむら)棒踊り」保存会 明治27～8年頃、船方さん5～6人が踊りを習ってきた。その頃、干ばつや、悪疫が流行っていたので、豊年満作や、悪疫退散を願って踊るようになった。長短の棒を持って、これを打ち当てて踊る、その音が悪疫を祓ったといわれ昔は老若男女皆で踊ったが、最近は踊り手が少なく課題である。

「合津(あいつ)獅子舞」保存会 合津宮園地区で、約250年前から伝承され、宇土(うと)の西岡神社の流れをくむ獅子舞との口伝えがある。大太鼓、小太鼓、ドラの音に合わせリズムカルに獅子が舞うことで地域に親しまれている。

「小屋川内(こやがわち)獅子舞」大正9年に、隣接する倉岳町(くらたけまち)の青年団との交流から伝えられた獅子舞が継承されている。青年団、消防団が中心になり保存活動を行っていて、太鼓、笛、ドラに合わせて、玉振り(小学生)が獅子を操るのが見どころである。10月に高戸(たかど)神社に奉納される。【平成27年度制作】



くまもとけんこうさまち こうさまち でんとうげいのう
熊本県甲佐町 「甲佐町伝統芸能」

「山出(やまいで)獅子舞」天正9年(1581)この地域で戦がありその勝利の翌日「大武(おおたけ)神社」に獅子舞を奉納したことが起源とされている。現在では毎年10月9日神社のお祭りに獅子舞が奉納されている。「北早川(きたそうがわ)獅子舞」寛文5年(1665)、この年は不作であり疫病が流行った。村人は五穀豊穡、疫病退散を祈って「敵島(いつくしま)神社」に獅子舞を奉納したのが始まりとされている。「振り子」は小学生の男女、獅子は大人が舞い手となる。「仁田子(にたご)雨乞いドラ」元禄10年(1697)以前に、既にこの行事が行われていた記録があり、起源といわれている。いわゆる“雨乞い”行事で、現在は7月と9月に、小学高学年はドラ、低学年は呼子を担当し、20人程がドラの周りでこれを叩く。「龍の舞・龍神太鼓」天正9年(1581)が起源とされ、龍神への貢物を惜しんだことで、怒る龍神を慰める舞とされている。地元出身の演出家が、「龍神の舞と龍神太鼓」を再現したと説明されている。「糸田(いとだ)大綱引き」起源、由来の詳細は不明である。糸田地区は昔から水害の多いところであった。綱は水防用に作られたもので、この綱作りから、村を二分して綱引きが始まったとされる。毎年1月15日に最も近い日曜日に実施されている。「ボシドラ」この地域に伝わる太鼓踊りである。宝暦5年(1755)に、天野岩戸の神話による神楽が作られたとされる舞を、八代郡種山村の五兵衛門より伝承を受けたと伝えられている。200年程継承されていて、雨乞い踊りでもあり、太鼓の響きが雨を呼ぶと伝えられた。【平成26年度制作】



かごしまけん やまと そん やまとそん そんらくさいし
鹿児島県大和村 「大和村の村落祭祀」

大和村には11の集落があり、それぞれに「十五夜豊年祭の祭祀」が行われている。細かくは差異もあるが、内容的には類似点も多く、次のように解釈しても良いのであろうか。「ミキ」は米粉に砂糖と芋汁を加え発酵しかけるとき飲むもの。「トネヤの祭祀」トネヤは神様を祭ってある神屋と思われ、そこで行う祭祀と思われる。「フリダシ」は“触れ出し”の意味ではないか。映像では大声で祭祀の始まりを村に告げている。「水取場の祭祀」多く地域の祭りや祭祀では、“お清め”の水を海から汲んだりしているが、同様に滝の付近や溪流に水汲み場が決められていて、神聖な水を戴くための祭祀が行われる。「土俵の祭祀」ほとんどの集落で青少年が“まわし”を締め相撲を取れる姿で祭祀に参加しているが、その意味についてはどう解釈したら良いのであろうか。勝手な想像であるが、一年間の無事息災を祈願しているのではないかとと思われる。【平成26年度制作】



おきなわけんおんなそん なかま ほうねんさい
沖縄県恩納村 「名嘉真の豊年祭」

恩納村名嘉真では、毎年旧暦8月15日頃に豊年祭が行われる。名嘉真には青年会がなく、豊年祭とそれに先立つ旧盆のエイサーを行うのは「二才中(ニセージュウ)」という高校卒業後37歳までの男子と、同じく22歳までの女子で構成される組織であり、沖縄の古い村落組織の形態をいまもよく残す。しかし、二才中を統率する二才頭の責務は重く、仕事を村外に求めることの多い今日では、区長を含む行政区の助けなしには豊年祭の実施が困難となり、豊年祭を成り立たせる諸行事も疎かになっている。平成27年度の豊年祭では、行事をできるだけ再現した。また、名嘉真で伝承される豊年祭の二才踊りや女踊りは、近代に琉球舞踊となる前の、近世の御冠船踊り(ウクワンシンウディ)をよく伝え、身体技法の点でも特色がみられる。しかし一時期、師匠の指導が及ばなくなって型が崩れた箇所の修正を試み、今後の手本となるべき映像を作成した。【平成27年度制作】



おきなわけんよみたんそん ぎま ふえーぬしま よみがえ どんとうげいのう まも
 沖縄県読谷村 儀間南又島 ～蘇った伝統芸能を守る～

読谷村の儀間(ぎま)に昭和の初期に途絶えてしまった伝統芸能があった。「南又島(フェーヌシマ)」と呼ばれていた。当時いくつかあったと思われる伝統芸能の中で唯一復活の可能性があるのがこの「フェーヌシマ」であった。復活に当たって、いくつかの努力がなされた。「フェーヌシマ」を見たことがあるという長老の話、嘉陽(かよう)で踊られている「フェーヌシマ」を参考にしたこと。全島「フェーヌシマ」大会を見に行ったこと、多くの人々の復活にかける熱意等々、大変な努力の結果、1991年秋、初めて村人にその踊りが公開され、今日では儀間を代表する伝統芸能となった。「フェーヌシマ」の由来は定かでないが、学者の説では、昔貿易が盛んであった頃、南方から伝えられたもので、かぶり物やその衣装、棒を持つことや奇声を発すること等、人間を超えた神となって、悪霊を祓い、村の弥栄(いやさか)を導いたのではないかといわれている。首里城祭に出演して多くの人々に感動を与えた。【平成26年度制作】



おきなわけんやえせちよう ともよせ しーしがなし
 沖縄県八重瀬町 「とうむしぬシーシ」 ー友寄の獅子加那志ー

初代の獅子は琉球王国の尚育王から拝領したもので、彫刻家田名宗経の作であった。友寄では御拝領の獅子を「獅子加那志」として敬い、また親しみをこめて「シーシ」と呼んで大切にしていた。ところがこの初代獅子は沖縄戦で行方知れずとなってしまった。1969年、24年ぶりに「とうむしぬシーシ」が復活した。二代目の獅子は平和祈念像を制作した山田真山の作である。8月15日まずは御願(うがん)から始まり、神人と村役は村の拝所を廻る。十五夜の月の下で、受け継がれてきた獅子舞が、戦場で行方知れずとなって消え去った多くの命の鎮魂と平和への祈りを込めて舞われる。【平成26年度制作】